

Title	金の章宗と李妃
Author(s)	外山, 軍治
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.379-p.388
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80489">https://hdl.handle.net/11094/80489</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 金の章宗と李妃

外 山 軍 治

## Chang-tsung 章宗 and Li-fei 李妃 of Chin 金 Dynasty

Gunji TOYAMA

In my thesis 'Studies in History of Chin Dynasty' 金朝史研究 (publ. 1964) and other works I have touched on Emperor Chang-tsung 章宗 (1189-1208) of Chin 金 who acceded to the throne after his grandfather, Shih-tsung 世宗 and facing difficulties political, social and financial, effected a glory of civilization.

This article is intended for making a few comments on Chang-tsung and her concubine Li 李 whose relationship I have not, so far, explored in my writings.

Facts treated of in this article are as follows:

Chang-tsung had many uncles born of different mothers but he had no children of his own, and felt lonely in his life of unrest. It was at this juncture when he found Li-fei 李妃 whom he favoured with an important position though she was a woman of low birth. Great power consequent on the high position bestowed on her increased her power more and more in the Court and exerted a great influence on her attitude toward Chang-tsung's uncles. But when the accession problem was raised by the Emperor's death she framed a plot to maintain her position, which ended in failure.

金の章宗の治世19年間は、政治・外交・社会・経済の各方面にわたって問題続出し、内憂外禍交々至るということば通りである。内憂とは何か。この頃とくにはげしくなった黄河の氾濫と、土地をめぐる女真人戸と漢人戸との反目である。外禍とは何か。蒙古高原方面よりする蒙古系遊牧民の侵寇と、失地回復をめざす宋の反攻である。黄河の治水と遊牧民の経略には龐大な出費を要した。これらは互いに因となり果となり、相乗的な作用を及ぼして金朝を苦しめたのである。

しかし幸いにも、名君の誇れの高い先皇帝世宗以来の文武官僚が生き残っており、後出の人材も豊富であった。支配民族である女真人だけでない。漢人、渤海人出身者にも人物があった。彼らは金朝を信頼し、忠誠を尽し、進んで意見を開陳し、職務を遂行した。金末の人劉祁の『帰潜志』巻7には、この状態を叙べて、「士気はもとより養わざるべからず。明昌・泰和の間の如き、文を崇び士を養う。故に、一時、士大夫争って敢言敢為を以って相尚ぶ」といっている。

この優秀な人的資源に恵まれて、章宗は、黄河の治水と水害救済、女真人戸と漢人戸との融和

に努力をつづけた。蒙古系遊牧民に対しては、界壕を構築してその侵入を防ぐとともに、兵を北方に派遣して、服属しない諸部を伐ち、一応これを鎮定することができた。宋の反攻に対しては、総力をあげて当たったが、結局、宋が主戦派の没落によって戦意を失ったので、金は従来よりも有利な条件で和議を結ぶことができた。

一方、内憂外禍の時期であったにもかかわらず、章宗の時代は、文化史上に輝かしい成果をあげている。泰和律令格式の編纂が完成したほか、礼制が完備した。また、文人が輩出して詩文が盛行した。章宗自身も立派な文人で、文運興隆期の皇帝らしい貫禄を示した。そして章宗の明昌・承安期は、彼の私淑する宋の徽宗の宣和期に近い様相を呈したのである。

これらのことについては、私はすでに『金朝史研究』その他<sup>(1)</sup>でとり扱った。本論文では、既発表の諸篇ではとくに論及しなかった章宗の寵妃李氏の問題をとり上げて、若干の考察を試みようと思う。章宗はその治世の殆んど全期間をこの女性とともに過した。彼女によって救われた面もあるが、結局はこれによって最後を汚されたのである。

章宗は第5代皇帝世宗の孫にあたる。父は世宗の皇太子允恭（顯宗という廟号をおくられた）であるが、この人が世宗よりもさきに病死したので、孫である章宗が帝位をついだのである。

世宗は、章宗について語る時、よく、皇后の嫡孫だといっている。この皇后とは、彼の葛王時代の妃（正妻）烏林荅氏のことである。烏林荅妃は、済南（山東省）尹であった世宗に従って任地にいた時、皇帝海陵王の宮廷に召し出された。彼女は死を覚悟したが、済南で死んでは夫に迷惑がかかると考え、中都（今の北京）近くまで来た時、護衛のすきをねらって自らの生命を断った。<sup>(2)</sup>

その後、東京留守に転じて遼陽（遼寧省）へ遷った世宗は、遼陽の渤海人や海陵王に反対する女真人たちの勢力を結集して自立し、海陵王に代って第5代皇帝となった。ここにいう渤海人とは、7・8世紀の交から10世紀初葉まで、東部満州を中心に広大な地域を占めた渤海国の遺民である。契丹（遼）からひきついて金の支配下に入ったが、中国的教養をもったものが多く、金朝に仕えて中央・地方の官吏となって忠勤をはげんだ。また、その豪族の子女には、金の皇室に入って諸王の側室になるものも少くなかった。実は、世宗の母の李氏も、海陵王の母の大氏も、どちらも遼陽の渤海人だったのである。

さて、帝位についた世宗は、貞操をまもるために自殺した烏林荅妃を悼み、昭徳皇后の称号をおくり、以後皇后を立てなかった。章宗の父の顯宗は、世宗と烏林荅妃との間に生まれたただ一人の男子である。第2子であるが、皇后の子であるという理由で皇太子に立てた。章宗はその顯宗と妃（正妻）徒単氏との間に生まれた。世宗が章宗のことを、皇后の嫡孫だといって、格別に目をかけるには、こういう事情があったのである。

章宗の幼名麻達葛は祖父皇帝の命名による。幼少の頃から祖父の希望によって、女真の語言・文字と漢字・經書の学習に励み、中国的教養とともに、女真人としての教養を身につけた。大定26年顯宗病死後、帝位継承者にふさわしい特訓も受け、26年、名を璟と賜わり、11月には正式に皇太孫に立てられた。

世宗が病没したのはそれから2年余を経た29年正月である。章宗が立って第6代皇帝となった。この時22才になっていた。

私はさきに、章宗が祖父世宗の遺してくれた人的資源に恵まれたことをいったが、父顯宗の異母兄弟にあたる伯叔父たちは、それは全く例外であった。これは彼に圧迫感しか与えない、迷惑な遺産であった。父の死によって早く帝位についた章宗にとって、これら諸王との対決は宿命的なものになろうとしていた。

これらの諸王は、中央政府で地位を与えられるか、地方の要地の長官として赴任していた。章宗が即位すると、父の顯宗の兄にあたる趙王永中を、判西京留守とし、漢王に進封した。西京は現在の山西省大同である。この永中の母は世宗の元妃張氏である。遼陽の渤海人張玄徴の子で、母の高氏は世宗の生母李氏の遠縁にあたった。この元妃張氏は世宗即位の大定2年、もしくはそれ以前に没していたが、とにかく永中は世宗の諸子の中で最年長者であった。

弟にあたる顯宗が皇太子になったことは、永中にとっておもしろくなかったようで、そのために顯宗も相当に気を遣ったことが、『金史』世宗本紀や卷19顯宗世紀、卷85鎬王永中伝などによって察せられる。そしてまた、章宗を皇太孫に立てる時にも、世宗はこの永中のことも念頭においたらしい。しかし尚書左丞相徒單克寧のすすめもあって、章宗が皇太孫に決定した。『金史』卷92徒單克寧伝にみえている。克寧は皇太子顯宗からひきつづいて章宗の後見役をつとめた元老で、この人が、その死に至るまで皇太孫の輔導にあたった。こんなわけで、永中と章宗とは、父子二代にわたって微妙な関係におかれていた。

ところが、明昌2年(1191)正月、章宗の生母である皇太后徒單氏が亡くなった時に、まずい事が起った。判真定府事の呉王永成(世宗の第4子、母は昭儀梁氏)と判定武軍節度使の隋王永升(世宗の第5子、母は才人石抹氏)とは、急ぎ帰京して喪に服すべきなのに、期日におくれてやって来た。永中に至っては、寒疾にかかっているといってやって来ない。

諸王に輕慢の心がある。章宗は憤慨した。皇帝の權威を示さなければならない。永成・永升には各々罰俸1ヶ月に処した。永中に対しては、来るには及ばないといったが、禪祭の時に初めて来た。

そしてこの章宗の感情をむき出しにしたように、彼は諸王府に王傅と尉とを設けた。この年2月である。諸王を輔導してまちがいのないようにするためだといっているが、明らかに諸王検制の目的で設けたものであった。永中は、自分は世宗の長男であるし、年長者であるのに、ややもすれば掣肘を受ける。おもしろくなかった。閑居したいと願い出たが章宗は許さない。彼は明昌3年、判平陽府事に遷され、鎬王に進封された。平陽府は山西南部の要地には違いないが、前任地の西京よりは格がおちる。章宗と諸王との冷戦が始った。

思えば章宗は、肉親に縁の薄い人であった。父には意外に早く死別した。つづいて祖父皇帝も亡くなった。それまでに妃もめとった。妃は蒲察鼎寿という名門の女で、結婚は大定23年、金源郡王時代であった。男子が生まれた。絳王洪裕といったが、28年10月に死んだ。蒲察妃も前後し

て亡くなっただけらしい。『金史』巻64后妃伝には、この人が初め金源郡王夫人となり、のち妃に進封されてから亡くなったと記している。そしてそれにつづいて、章宗が即位後この人に追冊を加えたと書いてあるから、おそらく、この時に欽懷皇后をおくられたのであろう。

生母徒單氏が亡くなったことは、さきにちょっと言及した。この人には、即位すると、尊んで皇太后とし、孝養をつくしていたのである。異母兄弟はあった。兄が4人、弟が2人。兄のうち豊王珣は、章宗ののち衛紹王が立ち、その衛紹王が殺されてから第8代皇帝宣宗となる人である。この人と章宗の仲は、よかったとは思われない。兄のうちの2人と、弟のうちの1人は、明昌年間に死んだ。

伯叔父たちが章宗にとって、めんどろな存在であることはたしかだが、それよりも、おもしろくないのは、彼自身にはまだ継嗣がないのに、伯叔父たちにはそれぞれ子どもがあるという事実である。彼は孤独感におちいるとともに、大きな不安にとらわれた。よい側室をおいて、早く男子をもうけたい。彼は切実にこの事を考えるようになった。章宗が李妃を発見したのは、このような状態においてであったと思う。

章宗が李妃を得た時期は大定の末、欽懷皇后蒲察氏を失った後であったろう。李妃、その名は師兒。この女性については、その出生がわかったことから話さなければならない。罪あって官に没入せられた奴婢は、宮籍監に属するので監戸と呼ばれる。李妃は、この監戸の女である。父の湘、母の王盼兒のどちらもが微賤であった。

『金史』巻64后妃伝と、『帰潜志』巻10とに、監戸の女子として宮中に入った李師兒が章宗の寵を受けるに至った顛末を記している。后妃伝によると、章宗が彼女のことを知ったのは、宮廷教師の張建と宦官の梁道の推薦によるといっている。『帰潜志』では、李師兒は少くして太后（章宗の生母）に給事したが、章宗は彼女を見てこれを悦び、即位するに及んで大いに寵嬖を受けたといっている。どちらが真実を伝えているのか判らない。

李師兒の容貌<sup>(9)</sup>については、后妃伝には梁道が章宗に向ってその才美を誉めたといっているが、張建の方は、宮女たちを教える時は、青紗のカーテンを隔てて顔が見えないようにしているが、理解力抜群で、音声の清亮な女子がいて、教え甲斐がある、といったという。また『帰潜志』では、「世に言う、李氏の姿色、甚だしくは麗ならず……」と世間の評判を伝えている。彼女の人柄については、后妃伝には、「性、慧黠…中略…尤も善く顔色を伺候し、旨意に迎合す」といい、『帰潜志』には、「性、慧穎、能く人主の意に迎合す」とあって、大体符合する。慧穎は時にまた慧黠と受けとられることもあろう。ただ彼女の教養の程度を述べたところは、両書の記載に精粗がある。后妃伝には、前引の記載の中略の部分に、ただ「能く字を作り、文義を知る」としているだけだが、『帰潜志』には、「初め書を知らず。後ち上（章宗）が文を好むを見て、遂に能く字を作り、文義を知る。婦人の変化、これあるかな」とある。この方の記載がすぐれている。后妃伝はその結果だけを書いたものである。

とにかく賢くて、章宗の心のすみずみにまで入りこんで来る女性、環境に応じて成長する女性であったようである。しかも、彼女は微賤の出である。それだけ献身的に仕えるということもあったであろう。章宗には何人かの妃はあったようだが、とくに、この女っぷりのよい李師兒に望

みをかけ、信頼し、寵愛するようになったのは自然であった。女っぷりとは容貌がよいということだけが条件ではない。ところが、この李妃は、この後、章宗の一代を通じて寵愛を失わなかったばかりでなく、宮廷内に抜くべからざる勢力を扶植した。明昌4年(1195)には昭容という高い地位を与えられた。驚くべき抜擢である。さらに5年には淑妃に進封せられた。父の湘は金紫光祿大夫・上柱国・隴西郡公を追贈され、祖父・曾祖父までもが追贈された。李妃の兄の李喜兒と弟の鉄哥も高官に抜擢された。喜兒はもと盗みはたらいたことのある人間だという。

李妃が宮廷内で勢力を扶植するについては、胥持国という実力派の人物との提携があったことを知らねばならぬ。彼の伝は『金史』巻129 佞幸伝に出ている。代州繁峙(山西省)の漢人で、経童科出身である。これは、士庶を問わず、13才以下の少年で、経書の暗誦能力テストに合格したものを採用するが、この科の出身者は進士合格者からは蔑視されていた。

持国が章宗に認められたのは、彼がさきに父の顯宗に仕えたという縁による。宮籍副監から同簽宣徽院事、ついで工部侍郎となり、宮籍監を領した。3ヶ月のちに工部尚書に遷り、宋に使した。そして明昌4年(1193)3月には参知政事になった。大した出世である。人となり「柔佞、智術あり」といわれる典型的な佞臣タイプであった。

胥持国と李妃との結托について、胥持国伝にはこういっている。「初め李妃、微賤より起り、幸を上に得。持国、久しく太子の宮に在り。もとより上が色を好むを知り、陰かに秘事をもって之を干<sup>もと</sup>む。又、多く妃の左右事を用うる人に賂遺す。妃もまた、自ら門第(家柄)の薄きを嫌い、外廷を藉りて重きを為さんと欲す。すなわち、しばしば持国の能を称譽す。是に由りて、大いに上に信任せらる。妃と表裏をなし朝政を箝擅す」と。出自の悪い寵妃と、キャリアでない手腕家との結托はよく見られる図である。なお、監戸である李妃の家を良人にすることに、彼の才覚が関係をもったと想像される節もないではない。

李妃が寵を得ていることが判ると、南京の李炳、中山の李著が李妃と同族だという系図をつくらせて李妃に取り入り、特別の榮譽にあずかろうとしたし、胥持国のところには、れっきとした高級官僚が集って、一大勢力を形成し、正義派とみなされる官僚と対抗するに至った。

李妃が昭容に進み、胥持国が参知政事になった明昌4年に、鄭王永蹈の謀反が発覚した。永蹈は明昌3年以来、判定武軍として、今の河北省定県にいた。この人は世宗の第6子で、母は元妃李氏である。この李氏は、世宗擁立の功勞者であり、世宗の生母の実弟にあたる李石の女である。しかもこの人は、大定21年まで生存し、皇后につぐ待遇を受けた。事は、永蹈を擁立しようとする一味が彼を煽動したことから始った。心を動かした永蹈は、妹の韓国公主の夫、河南統軍使僕散揆を味方につけ、河南軍の助けをかりようと考えたが、それは成功しなかった。その内、一件は永蹈の家奴の口からもれた。

ちょうどこの時永蹈は都に來ていた。章宗は、平章政事完顔守貞、参知政事胥持国、戸部尚書楊伯通、知大興府事尼麗古鑑に詔して鞫問させた。胥持国が加っていることが注目になる。事件関係者がそれからそれへとひろがって多くなり、久しく決定しない。章宗は怒って守貞らを呼

びつけて様子をきくような場面もあり、結局、永蹈、妃の卞玉と2子按春・阿辛、妹の沢国公主に死を賜わり、煽動した一味は死刑、その他軽重の処罰が決定した。明昌4年12月のことである。これが、『金史』巻85鄭王永蹈伝に見える事件の顛末である。諸王府に、司馬1人が増置せられたのは、その直後のことである。諸王に対する監督は一層きびしくなった。永中伝によると、「門戸の出入を検察し、毬獵游宴みな制限あり、家人の出入にみな防禁あり」といっている。

つづいて、章宗との関係が悪くなっていた鎬王永中が問題を起した。永中の生母元妃張氏の兄の張汝弼の妻高陀幹が予言者の言をたてにとり、永中が帝位につくようにと祈願したことが判った。明昌5年10月、高は処刑されたが、永中に対する疑いは解けない。折も折、永中の第4子阿离合憲の不謹慎な言葉が忌諱に触れた。取調べたところ、第2子神徒門のつくった詞曲にも不遜の辞があることが知られた。そのほか永中が、その侍妾に向って、自分が天下をた得ら、子どもは大王にしよう、尔は妃にしてやろう、といったということが家奴の供述で明らかになった。

しかし、永蹈の事件と違って、言葉の上だけのことで、謀反の企ての確証がない。この時、右諫議大夫賈守謙、右拾遺路鐸、平章政事完顔守貞らは、何とかして章宗の気持ちをなだめて寛大な処置をとらせようとしたようである。この事は『金史』巻73完顔守貞伝にみえている。守貞はこれで章宗の不興を買うことになる。結局参知政事の馬珙が、「永中と永蹈とは、罪状異るといえども、人臣将なきは一なり」といったので、章宗はわが意を得たという気になったようである。「人臣無将」は人臣としての道をつくす気がないという意味である。

刑の決定には尽すべき手は尽した。章宗は永中の罪状を百官に宣示して集り議せしめた。そして5品以下のものはいっしょに上奏させ、4品以上は便殿において入対せしめた。ところが、みな、「論ずること律の如くせん」といった。宮籍監丞の盧利用ひとりが命乞いしただけだった。永中には死を賜わり、2子は処刑。永中の妃と長子の石古乃とは威州（河北省井陘県東北）に安置した。その地で禁錮されたのである。落着をみたのは明昌6年（1195）5月。これが鎬王永中伝の概要である。当時この処置が酷に過ぎるとい批判もあった。章宗はしかし厳重な処置を希望していたようだ。官僚たちが、論ずること律の如くせん、と乞うたのは当時律令の編纂が完成しようとしており、人々に法律尊重の気持が強かったからだとのみ解釈しては、少々浅薄に過ぎよう。彼らが章宗の胸中をさきどりしたと解すべきであろう。それに、律によって論じたのなら、非難されることはないのであるから。

さて、永蹈・永中に対するこのきびしい処置、完顔守貞らの罷黜等の裏面に李妃と胥持国とがいたとは、胥持国伝の説くところである。参知政事であった胥持国が、章宗の気持ちを汲んで、嚴罰主義に賛成したことは判る。李妃が一枚加っていることは当然考えられる。むしろ、李妃が章宗に対して、嚴罰主義をとって諸王を威圧することを賛付けたのではないか。それを胥持国が参知政事の立場で支持したのではないかと思う。処分は諸王とその子に及んでいた。まだ継嗣に恵まれていない章宗と李妃との感情が、これに対して冷かったことは考えやすい。

平章政事完顔守貞は剛直の士であり、法律に通じ、金朝の故事に明るく、いわば法律の番人の

ような存在である。正義派官僚の頭領であったが、永中事件で章宗の不興を買い、明昌5年12月、永中の処置が決するより前に知済南府事に転出され、守貞を推挙したという理由で、董師中・路鐸らも地方へ出された。さらに守貞に対しては、平章政事時代の行為をとり上げて取調べを行い、官一階をおとして解職した。李妃・胥持国の結托によるとしてみれば理解しやすい。

完顔守貞の失脚とは反対に、胥持国の勢力は大きくなった。明昌5年、黄河は河南陽武で決潰した。これが一番大きな決潰であったが、持国は治水工事に従事中の人夫の衛生管理にあたった功勞で、明昌6年4月には尚書右丞になっている。彼のところに、胥門の十哲と呼ばれる十人の官吏が出入して、派閥を形成したのは、明昌・承安の交であろう。また李妃とその一族が跋扈したのもその頃のことと思う。監女、妃となり、経童、相となる、といったのは南宋人らしいが、正義派の官僚にとっては堪え難い屈辱であったと思う。しかし、後世からも優秀な人物がそろっていたと評せられる章宗朝の官僚たちは、胥持国の倂幸をいつまでも許容しなかった。

承安2年(1197)御史合が、胥門の十哲なる右司諫張復亨、右拾遺張嘉貞ら10人が、樞門に趨走していることを弾劾した。よほど目にあまるものがあつたのであろう。章宗はこれをきき入れ、嘉貞らを皆、外に出している。章宗はしかし、胥持国には執心であった。一旦致仕したものを1月余りのちに新しい任務につけた。樞密副使、樞參知政事として、省を北京(大定府)に行せしめた。持国に対する非難は多かった。この人事に対しても反対があつた。翰林修撰の路鐸は章宗に向つて、持国は姦邪の小人で、軍事を典らせるべきでないといい、もし、中央へ帰つてまた宰相になるようなことがあれば必ず天下を乱すだろうとまでいった。ところが、胥持国は間もなく軍中で死んだ。

しかし、よくまあ、胥持国はこれほどまでに章宗に可愛がられたものだと思う。ここが倂臣の倂臣たるところで、攻撃するものがあればあるほど、不憫をかけてもらったような点もある。それにしても、胥持国の跋扈をこの程度で压えたのは、『帰潜志』にいうところの敢言敢為の士の健在を物語るものである。

李妃の方は事情がちがう。李妃の兄弟が朝政に干預して、ひきつづき害毒を流した。攻撃するものもあつた。承安元年(1196)に監察御史になった姫端修が上書して小人を遠げんことを乞うた。章宗は李妃の兄の李喜兒を遣わし、端修に詔を伝え、小人とは誰のことか、その姓名をもつてこたえよ、と問わせた。端修はこたえた。小人とは李仁恵兄弟である、と。仁恵は喜兒の賜名である。喜兒は隠さずに具さに報告した。しかし、章宗は喜兒を叱責したものの、これを斥けることはできなかった。これは『金史』巻100宗端修伝に見えている。気骨のある姫端修と、君寵に自信をもっている李喜兒の様子がおもしろく描かれている。

巻10本紀承安1年12月己酉(4日)条には、「提点太医近侍局使李仁恵を遣わし、北辺將士に勞賜せしむ。官を授くるもの萬一千人。賞を授くるもの、<sup>ほと</sup>幾んど二萬人……」といって、章宗が李喜兒に恰好のよい役を仰せつけ、少しでも評判をよくしてやろうと配慮したことが知られる。

承安4年(1199)章宗は李妃を皇后にしようと考えた。前年の3年には、蒙古系遊牧民に対する経略が一応成功し、章宗もほっとしていた。金朝皇室では正妻は女真人と決っている。しかも



通婚の相手は、国初から徒単・唐括・蒲察・孛斡・僕散・紇石烈・烏林荅・烏古論諸部の部長の家と限られていた。前述の、世宗・顯宗・章宗の正妻は、各々烏林荅・徒単・蒲察氏であって、例外はなかった。章宗がこの事を知らないはずはない。それに監戸の女であった李妃を皇后にすることの適否も判らないはずはない。しかし、章宗は敢えて押し切ろうとした。彼女はもはや監戸の女ではない。淑妃である。皇后の地位は空いている。章宗はこう思ったのであろう。

しかし、大臣・台諫がこの事を問題にした。『金史』巻95張萬公伝に、「大臣、多く可<sup>き</sup>かず。御史姫端修、上書してこれを論ず。帝怒る。御史大夫張暉、一官を削らる。侍御史路鐸、兩官を削らる。端修は杖70、贖を以て論ず」とあり、「淑妃、竟<sup>つ</sup>いに元妃に進封せらる」と結んでいる。廷臣の意気込みをよく伝えている。張萬公自身も、章宗の下問に対して、家柄のよくない李妃を皇后にするのはよろしからずと答えている。これほどの反対があっても致し方がない。さすがの章宗も断念し、元妃に進封することで李妃を辛抱させた。

このような事があると、寵妃のわがままは一層はげしくなるものである。元妃といっても、その勢威は皇后にひとしかったという。兄弟の専横も改まらなかったらしく、また志操の低い朝臣の中には、その門に出入するものもあり、大した勢力になった。『金史』巻99徒単鑑伝にみえる。章宗を諫めるものも少くなかったが、結局、判っているけどやめさせられない、ということでは効果はなかった。

敢言敢為の士も女禍の鎮定はできないままに終りそうだった。李妃の勢いがもっとも隆盛であったのは泰和2年（1202）3月に、初めて章宗の男子忒隣を生んだ頃であろう。他の姫妾にも子どもはあったが、次々に死んでしまった。李妃だけが頼りであったのである。章宗の満悦はたとえようがなかった。彼は祖父世宗の最初の封号であった葛王に封じた。しかし、その悦びもつかの間、この皇子は2才で死んだ。その後も、後嗣を得ようと<sup>(5)</sup>する章宗の願いは切実だったが、うまくいかなかった。

承安6年の明年を泰和と改元した。金朝は財政難に悩んだが、李妃は贅沢三昧をやめなかった。章宗も、その私生活は派手であった。泰和4年（1204）、金は宋の攻撃を受けた。宋では金の財政難に乗じて、失地回復をはかろうとする主戦論者が実権を握ったのである。国境線の小ぜり合いがつづいた。6年に国交断絶、本格的な交戦状態に入った。宋部内の情勢がかわって和議が成立したのは8年（1208）であった。

宋との戦争中から、章宗は健康を害していた。皇子忒隣之死は彼の希望を無残にうちくだった。彼はついに、継嗣として、叔父にあたる衛王永済を考えるようになっていた。章宗が何故自分の異母兄の豊王珣を考慮に入れなかったのか明らかでない。衛紹王本紀に「柔弱にして智能鮮<sup>すくな</sup>し」といわれる永済の方が好きだったのであろう。永済は、世宗の元妃李氏の子で、世宗諸子のうちでは7番目にあたる。さきに死を賜った鄭王永中の次弟である。泰和7年2月に、武定軍節度使になっていた。

章宗の病気を嗽疾<sup>そくしつ</sup>といっている。呼吸器の疾患であろう。41才というのに、衰弱がひどかった。武定軍（河北省定県）から入朝した永済に、帝位をついでほしい旨を伝えた。傍にいた李妃

が、こんな事は軽々しくいうものではございません、と章宗をたしなめたという。11月乙卯（19日）危篤におちいった。ここから李妃の暗躍が始まる。衛王を立てることは妨げられない。が、それならばそれで、芝居の打ち方もある。宦官李新喜と相談し、平章政事完顔匡を召した。彼は顯宗・章宗に歴仕し侍読をつとめた旧臣で、しかも武功も立てていた。大臣の中から彼一人を呼び寄せて、衛王を立てることを決定した。翌日丙辰（20）、章宗が亡くなった。皇叔衛王に遺詔して皇帝の位につくことが命ぜられた。ところがこの遺詔の中に、つぎの事が示されてあった。朕の内人で現に妊娠しているものが2人ある。もし生まれる子が男であればその子を儲貳に立てよ。2人とも男子だったら、適当な方を立てるように、と。

ところが、その翌大安元年（1209）2月、新帝衛王（のち紹とおくり名されたので衛紹王と呼ぶ）の詔によって、2人の内人のうち范氏の方は胎形が己になくなったと発表せられた。さらに4月に至って、かさねて詔があり、内人2人の妊娠は、李妃、母の王昉児、宦官李新喜の陰謀によるものであるとし、李妃と内人の1人賈氏には自尽を賜い、王昉児、李新喜は死刑、李妃の兄安国軍節度使李喜兒と弟少府監鉄哥は地位を奪い、もとの監戸におとして遠方に安置することが決定した。范氏はすでに髪をおろして尼になったので処分の対象から除外せられた。

李妃の計画は、衛王を継嗣に立てることに一役買って恩を売り、それとひきかえに、その次には自分のいきのかかったものを立てることを約束させることにあった。権力の座にしがみつこうとする執念を示すものである。

内人妊娠は偽装。生み月のほぼ合った男児を李氏の関係者から連れて来て、遺児にし立てようと企てたのだが、うまく運ばなかったのである。新帝衛紹王は、先帝の遺腹にもしもの事があってはならないという名目の下に、平章政事僕散端と尚書左丞孫即康に命じて監視せしめた。ところが、章宗死去の2日後に、すでに太医副使儀師顔が状診して、范氏の胎氣損するあり、という報告したということが、『金史』巻101僕散端伝に見えている。范氏落髮のことがその結果としておこった。賈氏の方は、おそらく監視がきびしくて、さすが李妃の一味もその計画を実現するすきがなかったのであろう。

事件がこのような決着を見たのについて、『金史』巻98完顔匡伝にこういつている。「匡、定策の功を専らにせんと欲し、遂に李氏を構殺す」と。つまり、衛王を立てる企てに参画したが、定策の功を独占するために、すべてを李妃の陰謀ということにしてその勢力を一掃しようとし、そしてそれが成功したというのである。ここで完顔匡と新帝との結びつきが十分考えられるであろう。李妃の処分が決ると同時に、完顔匡は平章政事から尚書令に昇進している事実は、重要視しなければなるまい。

このようにして、章宗在世中にはどうしようもなかった李妃とその一族は、ここに至って一掃せられた。この時、自後は元妃と呼ばないで李師兒と呼ぶことも定められた。これが、この寵妃の受けたむくいである。<sup>(6)</sup>

註

- (1) 外山軍治『中国の書と人』のうち「金人と書」
- (2) 外山軍治『金朝史研究』各論六「世宗即位の事情と渤海人」
- (3) 金人の手になったといわれる李妃の肖像画が京都小川広巳氏の蔵に帰しているが、非常な美人に描かれている。これに関しては、羅振玉『永豐鄉人稿訂』所収「雪堂書画跋尾」に「金章宗妃李昭容真跋」がある。
- (4) 章宗は泰和7年、詔して永中の王爵を復し、諡を賜って厲といった。そして石古乃に勅し、さきに平陽府に収葬せしめた永中を、威州において地を掘り、礼をもって改葬させた。しかし、石古乃ら生存者に対する禁錮は相変わらず厳しかった。これは、まだ継嗣のない章宗の冷い感情がのぞいているようだ。禁錮のきびしさについては、すでに鳥山喜一氏が「大金国志に見ゆる愛王の乱について」(『白鳥博士遷厝記念東洋史論双』)に詳しく述べているので参照されたい。
- (5) 『金史』巻101僕散端伝には、僕散端のすすめによって、子どもが得られるだろうという阿魯不の託宣を信じ、その2女を宮中に納れたことが見えている。
- (6) これには後日ものがある。新帝衛紹王(衛王のこと)が殺され、章宗の異母兄豊王珣が迎立されて宣宗となった。宣宗は衛紹王を廃し、賈氏の事件は曖昧だとし、李氏一族を放免し、遼州安置を許している。

